

AB統合版

## 日刊ゲンダイ

日刊第10603号  
1月25日(水)  
2012年1月24日発行  
<日・祝休刊  
1990年8月6日第三種郵便物認可

志茂田 景樹氏 作家



## 私がハマったすアーブル本

5歳のとき、中耳炎をこじらせてしまい、

小学校1年の一時期、耳が聞こえなくなつた

ことがあるんです。ち

ょうど春から夏くらい

の頃で、夏休みに入つ

ても僕の耳に音は聞こ

えてきませんでした。ち

人の声は、声質によつ

ては聞こえないことも

ないけど、生活音に関

しては、背後でコップ

が割れても聞こえない

レベル。そんなわけで

水泳も出来ないし、友

達とも遊べず孤独な日

々を過ごしていました。

そんなある日、父の来客が僕にお土産を持

つてきてくれたんで

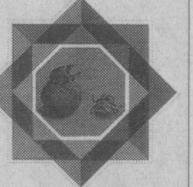
す。それが子供向けの「ファーブル昆虫記」

(写真は古川晴男訳 全6巻各1200円 偕成社)。もともと、

知らない世界が広がっていました。もちろん昭和22年当時、田んぼや畑では青虫などがい

## 無音世界に音をもたらしたファーブル昆虫記

少年少女 ファーブル昆虫記 1  
たまごさがしの生活  
著: 森鷗外・井村雅蔵



索してみよう! と早速、庭へ。するとアリの行列を見つけていたんです。そこには僕のまったく知らない世界が広がっていました。もちろん昭和22年当時、田んぼや畑では青虫などがいました。もちろん

蜂を探したり、ワニを探して子どもたちと一緒に遊んでいました。でも、この本を目に

見てはいたけれど、表面的なことしか知らなかつた。でも本に映る世界の中でイキイキと描かれていたんです。そこに強烈な印象を受けた僕はたちまちハマり、自分でも探し続けましたが

1940年、静岡県出身。76年、「やつとこ探偵」で第27回小説現代新人賞を受賞し、作家活動スタート。80年、「黄色い牙」で第83回直木賞を受賞。現在は、執筆のほか「よい子読み聞かせ隊」長としても活動。

の足で20分もかかる牧場に出かけたこともあります。ファンコロガシ

II牛のファンという連想

所のおじさんが言うには、食肉解体場だった。その後も出かけた先で「ファンコロガシを探し続けましたが、そこにはちゃんと音が伴っていました。この年になつても未だ不思議なことに、思い出にはちゃんと音が伴っているんですね。庭で聞いたよ。庭で聞いたセミの声、蜂の羽音、里芋の大きな葉っぱに打つ雨音、そして葉っぱの上にたまつた水

が傾いたはずみで、パシャンと落ちる音。恐らく勝手に音を夢想しつつ、せつせと働くやつてたんだしようね。耳はほどなくして治りましたが、「ファーブル昆虫記」のおかげ

以来、僕はコロボックル(森の妖精)になつた気分で、毎日庭で過ごすようになりました。だから

時間見ても飽きることはありませんでした。今でも、この本を目にすると音にあふれた夏がよみがえるんです。(次回は大岡玲さん)